



8月29日 生涯学習センター会議室にて

九州陶磁文化館でこの秋に開催される開館45周年記念特別企画展「初期伊万里ビッグバンー日本磁器の始まりの全貌」を控え、大橋先生の講座「日本磁器生産の始まりと海外輸出」を8月29日、生涯学習センター会議室にて開催した。

## 企画展を前に講座を開催！

# 会報



### 有田史談会

事務局

佐賀県西松浦郡有田町上幸平1-8-5

TEL 090-4740-4752

HP arita-sidankai.sub.jp/

✉ arita-sidankai@hotmail.com



この日の講座は、九州国立博物館へ寄贈された「小郡のコレクション」の作品を紹介しながら有田との接点を探るもので、中でも1660年代にインド向けに作られた有田の磁器と推察される内容の話題もあり、興味深い講座になった。

ちなみに小郡のコレクションは、ヨーロッパ向けの製品を中心に、国内向けの古伊万里や、明治から大正期の有田焼、薩摩焼など、貴重な作品の数々が構成されている。

## 2025年度の活動

- 4月 史談会通信 No. 60発行  
4/19キッチンランマにて  
昼食会&打合せ
- 5月 史談会通信 No. 61発行  
5/23名護屋城博物館見学
- 6月 史談会通信 No. 62発行  
6/13「私的柴田コレクション解説」山口信行氏
- 7月 史談会通信 No. 63発行  
会報No. 14発行
- 8月 史談会通信 No. 64発行  
8/29「日本磁器生産の始まりと海外輸出」
- 9月 史談会通信 No. 65発行
- 10月 史談会通信 No. 66発行  
10/5九州陶磁文化館開館45周年記念講演「肥前磁器始まりの全貌」
- 11月 史談会通信 No. 67発行  
11/15「やきものセミナー」&企画展鑑賞
- 12月 史談会通信 No. 68発行
- 1月 史談会通信 No. 69発行  
会報No. 15発行
- 2月 史談会通信 No. 70発行予定
- 3月 史談会通信 No. 71発行予定

今から約400年前、肥前地方では突如として白く硬質な磁器が開発され、産業として急速に発展した。その最初期には多久や伊万里で磁器の開発が試みられ、有田に移って爆発的に生産が発達したことが明らかになってきた。

今回の展覧会は現代に生きる私たちをも魅了する初期伊万里の優品と草創期の資料を通じて、これまでの研究成果をもとにその起源と発展の真相に迫る企画展である。

企画展の開催直後には、大橋康二先生の「肥前磁器始まりの全貌」と題する記念講演が行われ、我々史談会メンバーも拝聴する機会に恵まれ、楽しい時間を過ごすことができた。

8月に開催された講座と内容が重なり良い学習機会になった。



染付騎牛笛童子文皿  
1610～1630年代



染付辰砂鳥形香合  
1630～1640年代

## 九州陶磁文化館開館45周年記念企画展 初期伊万里ビッグバン

# 特別寄稿 有田の災害史

尾崎 葉子

国内外で災害が相次いでいる中、佐賀では幸いなことに大きな被害は令和3年以降免れています。しかし、「天災は忘れたころにやってくる」という先人の戒めもあります。記憶を風化させずに次世代に伝えていくことも、今を生きる私どもに課せられたことかもしれません。



文政の大火とも呼ばれ、「シーボルト台風」の異名をもつ

この有田皿山では特に文政11年(1828)の「文政の大火あるいは子年(ねとし)の大風」と呼ばれるものが最大だったようです。今から約200年前です。西日本を襲った台風がもたらした風雨は、時あたかもオランダ商館に勤務していたドイツ人医師のシーボルトがオランダ船のコレネリウス・ハウトマン号で国禁の品々を長崎港から持ち出そうとして、台風の風にあおられ難破したことで「シーボルト台風」という異名もあります。

長崎方面から佐賀領に向かつてきたこの台風はここ300年の中では総合力最強であったといわれています。最近では50年に一度とか100年に一度、あるいはこれまでに経験したことのない雨などという表現をよく耳にしますが、さすがに300年に一度という表現は見当たらないようです。

小西達男元佐賀地方気象台長(故人)らの研究によれば文政11年の台風は、九州を襲った時の中心気圧は935ヘストパスカル、最大風速は55メートルに達したと推測されています。台風は現在の長崎県西岸に上陸し、佐賀、福岡、山口の各県を横断したものと思われます。

『浮世の有様』(有田町史 政治社会編Ⅰ)という資料によれば、ここ有田に襲来したのは「四つ時頃(午後十時)」で、「辰巳(南東)の方より大悪

風吹き出し、家毎々に戸を吹き散らし、家も崩るる如くにて、さも恐ろしき次第なり。子の刻(午前零時)頃、岩谷川内という所より出火ありけるが、風は強く吹き立ち雨は頻りに降り、火は風に任せて飛びまわり、天より火の降りし如くなり」という火災の様子を伝えています。

さらに「地震は天地を覆さんばかりなり。川は大洪水となり退き行く方もなかりけり」と、火事と洪水と大風が一度に襲った最悪の状態を伝えています。火災の被害はよく知られたところですが、実は同時に水害も襲い、狭い内山の通りは大洪水となり、人々は迫りくる火と水から逃れるのに必死だったことは想像に難くありません。

「松本庄之助伝」(松本源次著)によれば、上幸平の松本家は明治22年(1889)に着工し、2期、3期と追加工事をして足かけ16年をかけて完成しています。建設にあたって、両親や古老から「文政の大火」の惨状を聞かされていた庄之助さんの母親ともさんは、新築に当たって火事に対しては建物の周辺に相当の空き地を必ず構える事、大水に対しては床を少なくとも一間(約2m)以上、道路面より高くすることを息子に注



上幸平の松本家

文しています。その結果、前面にあった4mの前庭で昭和初期の道路拡張の際にも建物には影響はなく、3m上げていた床は昭和に入って地下倉庫に改造され、23年の大水害でも若干の被害ですんだということです。

また、お隣の平戸藩主であった松浦静山が著した『甲子夜話』には「旅人通り候得ば、ああひだるさよと云う声左右に聞え候。有田辺を通り候ものの咄に承り候」と記しています。

もう一つ、『文政時津風騒動記』(有田町歴史民俗資料館蔵)という資料には当時の大庄屋某が一旦は家族と共に逃げたものの、余りの周章狼狽で公用向きの書記或いは年貢方の差し引きなどを記した帳面などを持ち出すことを忘れたことを思い出し、立ち帰り、哀れな最後を遂げたことなどが記されています。昔もこの

ような責任感の強い町役人がいたことが偲べれますが、暗闇の中、恐怖で人々は逃げ惑い、亡くなった人は40〜50人ほどであったといわれています。かろうじて逃げおおせた人々も、嵐が静まってから皿山に戻ってみると、そこは一面の焦土と化していたといわれます。その後の復興のさなか、人々は登り窯の焼成室を仮住まいとし、それは『皿山代官旧記覚書』によれば「釜住居」と記され、その後、巡ってきた冬の季節の寒さや飢えを凌ぎましたが、同覚書には「有田皿山焼失二付、数千人之釜焼細工人共職方相続難相成」とあり、まさに有田皿山存亡の危機でした。

この非常時に岩谷川内の正司家は米や着物など約300両の救援物資を皿山の人々に差し出しています。当時の皿山の人々の努力もさることながら、佐賀本藩や紀州・筑前の陶器商人たちにも援助を願い出て再興を果たし、400年余の歴史が途絶えることなく現在に続いている焼き物の町・有田ですが、今年も大きな災害がないことを願っています。

※有田町歴史民俗資料館ブログ「泉山日録」平成28年9月12日付 参照

## 急に本気を出した紅葉と 三人で歩いた秋

秋が深まり始めた  
井手 邦男

頃、娘と妹の三人で佐賀県基山町の大興善寺を訪れた。娘とは普段からよく出かけるのだが、妹を連れての外出は久しぶりである。私には姉と二人の妹がいたが、姉と次女はすでに天へ旅立った。今、兄妹として昔話を共にできるのは一番下の妹だけになり、その存在を以前よりも大切に思うようになってきた。その妹は、つい先日まで息子の玉ねぎ収穫を手伝っていたらしく、「気分転換したいし、たまには夫と離れんと気が休



まらん」と笑って言っていた。それなら紅葉でも見に行こうという話になり、娘も含め三人で出かけることにした。

大興善寺へ向かう途中、道沿いの木々はまだ色づきが浅く、「これは少し早かったかもしれない」と思うほどだった。娘も「まだ青いね」と言うので、内心少し気がかりだった。しかし、長い階段を腰をかがいながら上りきり、門をくぐった瞬間、景色は一変した。境内は赤、黄色、オレンジに染まり、見事な紅葉が一面に広がっていた。妹が「ここだけ急に本気出してるね」とぼつりと言い、三人で思わず笑った。

紅葉の下を歩きながら、妹は「来てよかった」と言い、娘は夢中で写真を撮っていた。その後ろをゆっくり歩きながら、私は昔の家族旅行を思い出していた。若い頃はやりたいたことが多く、景色をゆっくり見る余裕はほとんどなかったが、今はこういう“ゆっくり歩く時間”がいちばん落ち着く。参道には多くの人が訪れていたが、皆静かに紅葉を楽しんでおり、境内全体が落ち着いた雰囲気包まれていた。石畳を踏みしめる音や、風に揺れる木々の音が耳に心地よく、季節の移ろいを素直に



感じられるひとときだった。一回りしたあと、休憩処で抹茶をいただいた。赤い毛氈が敷き詰められた空間で、紅葉の木々を眺めながら飲む抹茶は、どこか柔らかい味がした。添えられた小さなお饅頭は柿の葉の上に乗せて出され、素朴な見た目がなんととも良かった。三人で並んで座り、特に会話がなくても、その静けさが気持ちよかった。

帰り際、妹が「またよろしくね」と言った。娘とはまた別の場所へ行くだろうが、妹を含めた三人の時間は、そう多くはない。家族の形が少しずつ変わっていく中で、今日過ごした静かな時間は、これからふと思いつくだろう。大興善寺の紅葉は派手すぎず、どこか落ち着きがあつて、今の自分にしっくりくる。次の秋も、またこの三人で訪れられたらいいなと思ひながら、寺をあとにした。

江戸と有田の  
暮らしを考察する

鶴 一樹

徳川家康公が江戸に幕府をひらいて戦のない世となった。日ノ本の農民、武士、商人はのびのびと全力を出し、暮らしを良くしようと頑張った。まずは米作り。新田開発、水利、灌漑、肥料など工夫して増産が成功した。そして北前船などで全国の物



資を大阪に集め、江戸に送る体制を作り商人が大きな仕事をした。江戸は火事が物凄く多く「江戸の華」と言われた。大工や左官職人は大忙し。仕事で沢山ある江戸に人口が爆発的に集中した。慶長五年(1600)、日本の人口は1200万人ほど、それが約100年後の享保六年(1721)には3200万人となった。その後は、災害、地震、天候不順などで人口は3000万人のまま明治を迎えた。

そんな江戸の庶民の暮らしを再現すると、野菜売りの熊五郎さん朝の4時頃裏長屋で目を醒ます。七百文ばかり懐の巾着に入れて、やつちやば(青果市場)行って、蕪、大根、蓮根、芋などを仕入れ、天秤棒を担いで町中を売り歩く。日暮れには上手く売り切って仕事を終える。売り上げ千三百文ぐらい。仕入れを差し引き六百文稼いだことになる。天気が良い日はいいが、雨の日風の日バツタリ!売れない日もある。

しかし今日はたんまり銭があるので酒を飲みに行くことにした。酒は一合二十文、五合ばかり飲むかもしれない。そば一杯一六文、にぎり寿司一個八文、天ぷら一個四文、ダンゴ一串四文、百五十〜百六十文で済む。物の値段が安い。一文は今の金

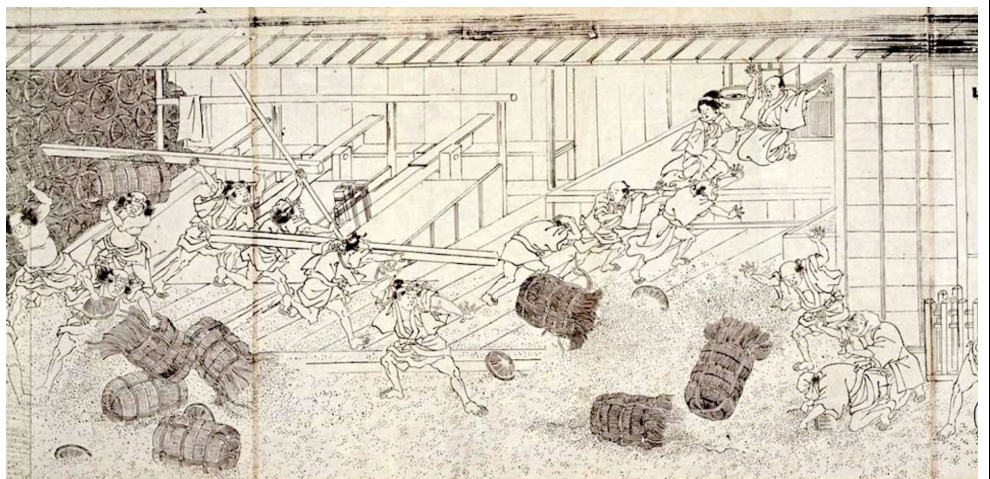
なら20〜50円。一両は千文(一両は五〜八万円) 残った四百文は明日の仕入れに残しておく。こういう一日だったかな?

当時、天候不順で冷夏、旱魃<sup>かんばつ</sup>で米の大作。摂れない時、これを利用して悪徳商人や米問屋などが米を買い占めて、市場に米を出さず高値を待つて大きな利益を得ようとした。

江戸で、天明三年(1783)「天明の打ちこわし」が起こった。生活に困窮した下層の民衆が、米問屋、富裕の商人、高利貸を標的に襲撃する。こん棒などで建物を打ち壊し、家財や米などを略奪し暴れまわった。この騒ぎは翌年まで収まらなかった。

こんな打ち壊しが大阪、石巻、小田原、宇和島など日本中で同時に起こっている。そして長崎でも高値の米に怒った民衆が買い占めた米問屋十四軒を襲撃し打ち壊した。長崎奉行が出馬してやつと収まった。

打ち壊しは有田でも起こった。天明七年(1781)七月一七日夜十一時、数十人の町民が大樽の米屋甚兵衛と米屋喜エ門の家に押し掛け襲撃した。大石を投げ込み家財など壊し米を持ち出した。そして、上幸平の米屋惣右エ門の家に向かっていたところ、皿山代官の下役郡目附島田丈七と役



江戸時代の「打ちこわし」 『江戸市中騒動図』

者中溝常右エ門が駆け付けたので群衆は逃げ去った。その場で逮捕された二人の自白によつて、一五名が佐賀の評定所に送られた。もともとと言え、米一升が百八十文にも値上がりし、佐賀藩の定めたのは米一升四十文なのに四倍半にも値上がりしたのだ。有田皿山は焼き物作りだけで収入を得、運上金を搾り取られた。

有田皿山を支えるにやあさん（荷物を運ぶ人夫）は、少ない給金で武雄、伊万里、西有田から売りに来る米、野菜、みそ、しょうゆなど全てを買うほかない。にやあさんは有田から伊万里まで一七キロの道のりを、焼き物を詰めた重量六十キロの荷物を運ぶ。多い時は一日に五十〜六十人が行き来していた。日銭は三十銭！ 仕事のきつさを考えれば恐ろしく安い。が生活していた。

そんな中に明治の頃、有田の伝説の男。井手金作がいた。ロクロの名人で、大物づくり給金はケタ違い。なんせ金がたまると武雄や佐世保の色街に出向いて、紋付・シルクハットのいでたちで現われ、店に入り浸りになり懐が空っぽになるとご帰還だが、その時は芸者二・三人と人力車を連ねて帰ってくるという豪快なカネの使いっぷりに「華の金作」「ハデの金作」と言われた。こういう気質は「宵越しの金は持たねえ」（金に執着するのを野暮といって嫌った気質）といった江戸っ子の「粋」に通じていて、有田の町人にもちゃんと粋な人がいたと、心強い気持ちにさせられた。

【参考】「有田皿山の制度と生活」  
宮田幸太郎著

## 琵琶湖一周の旅

坂井 勝也

昨年12月6日より9日まで3泊4日の旅行の日程で、肥前観光のバス（伊万里市東山代町の出雲さんの案内）で琵琶湖一周の旅に夫婦で参加しました。

伊万里を出発し門司まで移動すると、新門司の名門大洋フェリーターミナルから大阪南港まで船中泊をしながら移動しました。

大阪南港に着くと国宝の彦根城をはじめ幾つかの史跡を見て回りました。彦根城の階段は垂直に近く、手すりを一生懸命つかんで登りました。天守閣からは彦根の町が一望され、



国宝 彦根城



彦根城天守閣からの展望

自分が城主になって彦根の町を取り仕切っているような気持ちになりました。彦根の町は、桜田門外の変で暗殺された井伊直弼の生誕の地です。彦根の城下町はそういう大人の<sup>だいじん</sup>出る雰囲気漂う町だと感じました。

琵琶湖については、琵琶湖商法とか日本で最初に水力発電所が出来たところと聞いていました。琵琶湖を見るのは初めてでしたが、すごく大きく物静かで堂々としているように感じました。水際にきれいな松ぼっくりがあつたので2、3個持ち帰り自宅の玄関に飾っておりましたが、いつの間にか消えておりました。人間に置き換えると拉致にあたります

が、松ぼっくりは自分の最後を過ごすところではないと夜中に脱走して、今頃は熊本あたりに一休みしているのではと思っています。

今度の旅は大病の後のことでもあり、今回が最後の旅になるかもわからないと思っていたので、見るものみんな輝いて見えました。



日本最大の湖 琵琶湖の全景

## 有田の西国三十三所

前田 順三

有田町の泉山から現在の伊万里市二里町まで「有田光明新四国」という遍路道があるが、「西国三十三所」の写し霊場もあったようである。その名残りが本町の平野観音堂というところにあった。毎年八月十七日に「平野観音さんの祇園」として小規模ながらも執り行われていたが、その観音堂が老朽化で、屋根が落ち込み、堂内の仏壇のところに泥が落ちるなどしてきた。年に一度、祇園の前に掃除をすることで何年も凌いできたが、いよいよ危険であることか



解体前の平野観音堂（本町）



観音堂に掲げてあった御詠歌

ら、四年ほど前に解体された。

なぜ西国三十三所の札所であることがわかったかと言えば、解体前の堂内に十一番札所の御詠歌「第十一番 準提観世音（准胝観世音） ぎやくゑんも もらさですくふ ぐわんなれば じゅんていだうは たのもしきかな（逆縁ももらさで救う願なれば 准胝堂はたのもしきかな）」という額があり、最初、四国八十八カ所十一番札所の御詠歌かと思っていたが、調べたらそれとは違い西国三十三所の十一番札所の御詠歌であった。

そこで、有田（いつ頃か、またどの程度の範囲なのか全くわからないが）には四国八十八ヶ所だけではなく、西国三十三所の札所もあったのかと思つた。そこで他にも有田に西国三十三所の札所もないかと探したが見つかることはできなかった。

堂内には観音菩薩と地藏菩薩が安置されていたが、解体後は外尾神社（普賢さん）の境内にある大師堂に遷座し、現在はそこに弘法大師、不動明王などと一緒にお祀りされている。話が少し逸れるが、明治三十九年の有田村役場「社寺二関スル書類」の中に、外尾神社境内社として「聖徳神社」があったように書かれてあるが今はない。その中に祀られているであろうと思われる聖徳太子像（孝養像）も大師堂に遷座しお祀りされている。

ちなみに、四国霊場は「八十八ヶ（か・カ・箇）所」であるが、観音霊場は、「三十三所」といい、「ヶ・カ・カ・箇」はつけない。また、八十八の四国霊場を巡るのを「遍路」といい、三十三の観音霊場を巡るのを「巡礼」（「順礼」ともいう）という。

私は、四国八十八ヶ所の写し霊場については、有田の他に、山内、武雄、伊万里、山代、塩田などの新四国八十八ヶ所の札所を探して回ったが、それぞれ六十ヶ所ほどしか見つけることができなかったが、その中に山内に観音霊場の札所と思われるところもあった。十一番、十六番、二十一番（十一番と二十一番は同じ場所）であり、十六番札所は目立つ場所

にもあり清掃もよく行き届いていて、近隣の地区の方の日頃のお世話のほどが感じられる。

そのほかの町にも有田と同じように四国霊場と共に観音霊場の写し霊場があったと思われる、大町町のお寺に行ったら観音霊場の一番札所があった。

旧有田町、旧西有田町、伊万里の二里町の中にも「観音さん」と呼ばれているところが多数ある。それらの中には八十八ヶ所の札所とされているところもあるが、それ以外に観音堂だけで地元の人々にお祀りされているところも多い。

三十三という数字は、「法華経」『観世音菩薩普門品第二十五』（「観音経」）に、観音が相手に応じて三十



平野観音堂内にあった観音菩薩と地藏菩薩

三の姿に身を変え(三十三応化身(おうげしん)、教えを説いて衆生を救うとされている。この信仰から三十三観音や三十三所霊場が成立した。

外尾町の椎谷神社の本殿手前に池があるが、その池の左側に観音堂があり、その裏の岩面に三十三体の石造の観音仏がある。それら三十三観音がいつ造られたのかと思っていたところ、三十三観音仏の一つに寛政九年(一七九七)と彫ってあるものがあり、三十三体とも概ね同時期に造られたと推測する。また三十三観音の前にある地藏菩薩の石造物があるが、その台座には明和七庚寅(一七七〇)と刻まれている。

三十三観音というのは、先ほども書いたが、「法華経」の説く観音菩薩三十三身に基づき、その後の中国における故事などに基づいて考えられたのが、楊柳・竜頭・持経・円光・遊戯・白衣・蓮臥・瀧見・施薬・魚籃・徳王・水月・一葉・青頸・威徳・延命・衆宝・岩戸・能静・阿耨・阿摩提・葉衣・瑠璃・多羅尊・蛤蜊・六時・普悲・馬郎婦・合掌・一如・不二・持蓮・灑水の三十三種の観音である。

椎谷神社の石造の三十三観音は一

体が四十五〜四十六cmほどで、一体々々違う容姿で彫られている。前記の三十三観音のそれぞれの外見の特徴、御利益などを調べてみて当てはめてみた。特徴が顕著なものもあったがそれは稀で、ほとんどの観音仏は曖昧で、概ねの外観で当てはめてみた。その御利益、御利生は多岐に亘り、確かにどれかの観音仏がどのような時でも救ってくれそうである。

現世利益の身勝手な発想はおいでおくにしても、よくぞこれだけの観音仏を彫ったものと、発起した当時の人のその篤い信仰心には敬服した。岩面に穴を深くあるいは浅く掘ったり、坐しやすいうように台座を置くところを平たくするなどして、それぞれに手を入れてあることがわかる。また祈願者の名前が彫ってあるのもいくつかあり、久富、松村、川原、前田という名字が読める。

私は外尾町生まれで、椎谷神社を地元の神社として親しんできたので、神社とはこのようなものと当たり前のように思っていたが、いろいろと各地の神社を廻るにつれて、椎谷神社がいかに良き神社であるか、そしていろいろなものを見過ごしてきたか、最近特に認識させられているところである。

## 古伊万里にみる「染付の美」

山口 信行

古伊万里に興味を持ち始めた頃、もう三十年位前にもなりますでしようか、ある佐賀市にある古美術店に初めて入りました。今ならそうでもないかと思われますが、あの頃は、やはりというか、まア、こちらも少々緊張してはいたとは思いますが、いちげんさんに対して何となく態度が無愛想。店主の方に何となく、うさんくさそうに見つめられてる気配を背に感じながら、私は商品を見てまわっていました。

「お客さんは、どんなのが好いんさア？」と、突然声がかかりました。私はすかさず、「染付が好きです。」と答えました。すると、その一言で、店主の様子が一変しました。「うん、そうね。」と、ニコツとしながら・・・。その後は愛想も良くなり、雰囲気も、改善、しました。

店主が問うたのは、多分どんな品が欲しいかであったのでしようが、私が古伊万里の種類で応じたので、この客はズブの素人ではないナと考えられたのではなかったからではと、

そのとき思ったのでした。前もって古伊万里の本を読んでよかったと思いつつも、この世界での「染付」という言葉のもつ重みをあらためて自覚しました。そして、生まれて初めての、染付の、ちっちゃな蛸唐草の徳利をそこで求めたのでした。

「染付」という言葉の由来は、はっきりとはしていないようです。もの本によれば、白地に青一色でモチーフが描かれた器は、藍染めの着物を思わせることからそう呼ばれているとも云われています。染色用語から、というわけです。「染付」と呼ぶにはどうやら二つの条件を満たすことが必要のようです。一つは、素地が白磁(磁器)であること。さらに、高火度で焼成される透明釉の下に文様が描かれていること。この双方を満たしている、ブルー&ホワイトのやきものというわけです。中国では青花(青華)と呼んでいるようです。例えば、イスラムやヨーロッパの陶器の場合には、白釉藍彩と呼んで染付と区別しているといえます。

ところで、染付の青の色素は、酸化コバルトを主成分とする絵の具で、一般に呉須と呼ばれ、それに、透明の釉薬によって発色が初めて鮮明に



なるといふわけ。その呉須は、近年では人工的に合成しますが、もともとは天然に産出する鉱物であり、江戸期においては中国から輸入されていました。

以下にあげています対の画像は、江戸時代始めの初期伊万里と呼ばれています、同じ呉須でも染付の色

調に違いがあるようです。これは、酸化コバルトのほかに、マンガン、鉄、クロム、ニッケル、銅等を含み、これらの微量の金属が染付に色調の違いを生み出しているとも云われています。もちろんそれだけではなく、呉須はそれ自体では鮮やかな藍色とはならないので、透明の釉薬によって発色が初めて鮮明になるとも云われますので、それらが複雑に絡みながらそれぞれの色調を生み出しているのかもしれませんが。もちろん、産出地区の陶石の違い、焼成の条件等で、色合いが異なることもあり得ると思われ。一般に、酸化コバルトの比率が高いと紫色の強い色調、酸化マンガンが多いとやや灰色がかかり、酸化第二鉄が加わると褐色がかった藍色になると云われているようです。

更には、焼成の違いでは、還元炎焼成では発色も良いのですが、酸化炎焼成では焼成が甘くなり、ムラが出たり褐色がかった傾向があるようです。有田磁器の染付には、いすの木、灰を用いるのが最良とされ、淡青色の微妙な色調が染付の色を引き立てています。

古伊万里では、「赤絵」の魅力はもちろんですが、それ以降でも、や

や青みがかった地肌の色調に、落ち着いた静かな藍色の魅力が映える「染付」に多くのファンがいるのもよく分かります。まさにその両輪あつての、江戸期の有田焼、古伊万里の魅力と云えるのではないかと思います。

## 岸岳城主、波多親(ちかし)

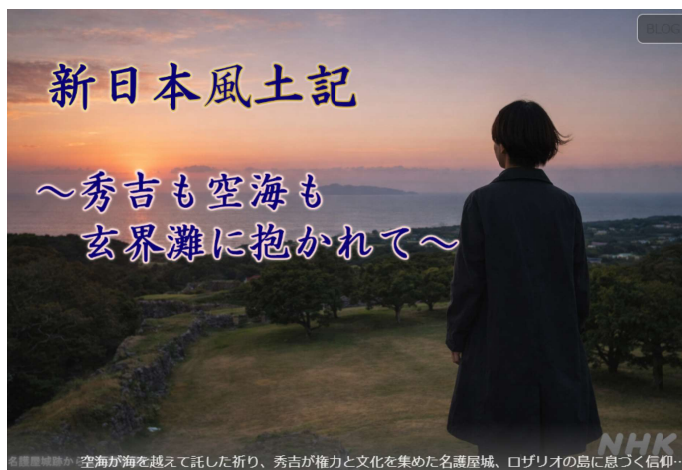
鶴 美百合

2026年、明けましておめでとうございます。今年もどうぞ宜しくお願い致します。えー、昨年も高速であつという間の一年でした。日に日に時は早く通り過ぎていくようです。今年も史談会の皆様にとって、全てにおいて末永く馬〜くいきますように！

さて、私事ですが、お古のPCが使えなくなつて、再び、いっぽん指👉エッセーが復活しましたので、今度こそ、手短になります。🔪切も間近なのでどうしようかと焦っております。PCの件では、ハブニングではありましたが、今年、なんとなくですが、幸先良さそうかな予感がします。

## 新日本風土記

～秀吉も空海も  
玄界灘に抱かれて～



新日本風土記で放映された「秀吉と空海」

なぜかと申し上げますれば、お正月明けの1月6日(月)と7日(火)の番組でNHKの長寿番組、元新日本紀行いえ、今は、新日本風土記で「秀吉と空海」が放映されたのでした。副題は「秀吉も空海も玄界灘に抱かれて」というエピソードが繰り広げられました。

待ちに待った、番組の始まりは、眩しい太陽がキラキラと海を照らし、海士(あま)が釣った新鮮な魚を手早く料理する、おしゃれなイタリアン・レストランからでした。

その美味しそうな豪華な鮑、いくら等のシーフード満載の大盛りのお



法安寺にある波多親の石像

カメラの映像では、法安寺の玄関左側にある、わあ、えーっ、「あつ！と驚く為五郎！」的な巨大な（高さ10m程？）の波多親の石像がデーンと映し出されていました。そしてカメラは波多親のお顔の方へ Zoom in !!

皿、えっ？ここはイタリアのシチリア半島？といったも過言ではなく、小さな教会も見えています。ここは、唐津玄界灘にある小島で「松島」というパラíso（樂園）のようなどころでした。そして、島中の人達がキリシタンだそうです。その中には、ローマまで行った信徒さんがお祈りするシーンがあり、私のハート♥は「ハレルーヤ！」でした。

後半は、もう、圧巻で「法安寺」（唐津北波多）にスポットが当てられました。待ってました！「法安寺」とは、驚くことなかれ！私の母の大叔母さんが大正時代に始めたお寺です。

すると、どうでしょう、後光がさしたような穏やかなお顔の波多親がやつと現れたように感じたのでした。

さて、波多親と言えば、海外貿易で名を馳せた上に、松浦党にルーツをおく超！エリートであります。いっぱい、言うまでもなく、日本最古の「割りだけ式登り窯」の古窯群がある事は、史談会の方だったら、全員ご存知ですね。ハイ。

いつ始まったのかは諸説ありますが、この古窯群は慶長3年(1598年)以降に開窯された唐津系陶器窯より古く高麗末期の窯業技術の特徴があるという、野田敏夫先生説ではないだろうかと思っています。

このように、有田焼きの源流とも言われる唐津焼、最先端の海外の技術を取り入れ上松浦をリードした藩主ですが、波多親には、なんと！菩提寺がありません。

「ええっ！なして？」ですよ。波多親は何かをしでかしたのでしょいか？ いいえ、なーんも、悪か事はしとらっさんと私は思うのです。

そこで、番組では、岸岳城の麓にある「法安寺」が菩提寺を持たない波多親一族と家臣の冥福を祈っている一つのお寺として紹介されたので

した。番組では、法安寺に祀っている波多親の奥方で美人で有名な「秀の前」と「親」のツーショットも写しだされましたよ。

さて、それはそうと、先ほどの波多親に菩提寺がないとはどうも気になりますね？ では、タイム・マシンで、文禄の役(1592年)に戻ってみてみましょう。

岸岳城主波多親(ちかし)(竜造寺隆信の娘婿)は、上松浦党の領主で文禄3年(1594年)朝鮮出兵により疲れ果てた体で、やつと名護屋湾沖に辿り着いたのでした。

海上から岸岳城がある野山を仰ぎ観ていた帰陣途中に、突然、豊臣秀吉の命令で、「改易！」となり、所領没収！それからは、あれよあれよと常陸国築波佐竹義宣の預かりとなつてしまつて、その後、どこかで亡くなつたと伝えられているという、なんとも「敗者」というイメージで語られています。

そんな、これでは、一方的すぎるではありませんか！波多親には訳があつたのです。が、しかし同年旧領地は秀吉のお友達の寺沢志摩の領地となつてしまつたのです。もうっ！残された波多一族や家臣達、村人は



名護屋城址から望む玄界灘

どうすればいいのでしょうか？

しかし、日本史を編纂した宣教師ルイス・フロイスは知っています。「名護屋は、あらゆる人手を欠いた荒地」と表し、「波多殿の実家とは、島原日野江城主ドン・プロタジオ(有馬晴信の洗礼名)の長兄にあたる波多殿は(波多盛は子供がいなかった為、奥方の要望で島原の有馬から養子に入つた人です)肥前国にその領土を持つていたが、同領内の名護屋という港に、関白殿が宮殿と城と町を造営した事は先に述べたとおりである。

ところが、波多殿は高麗に渡ると、病氣であると偽って熊川から先に進

真言宗善通寺派に属し波多三河守を大日如来にたり本尊とする大正十二年(元三)三月小野妙安師によって開山されたもので、御利益・功德のあらたかな寺として県内はもろろん遠く県外からの参詣者も極めて多い。

由緒ある波多氏は没落以来菩提寺とならぬ有様で、岩木孫といわれる輪塔は各地に散在し、無念の最後を告げ多くの家臣の霊魂は守る所もなくさまよひ成仏を求めている。師は一念發起して岸岳の深山に籠り一念神仏の真髓に徹する靈験を会得し、たゞ波多氏一門の冥福を祈つたやがて師を慕って参籠する信者は多く御仏の御加護を受けて下山する者がすくなく多い。

境内には日本一と称する釈迦涅槃の大石仏を始め、大日如来不動明王、弘法大師地蔵菩薩の五百余体の石仏、磨崖仏があり、梅桜、つつじ、あじさいに彩られた一大新四国八十八ヶ所霊場である。

### 法安寺の由来が書かれている

まなかつた。彼はこのために三人の武将から告訴され、彼らは高麗から、この件を関白に報告した。波多に与えた俸禄領地を没収するために、なんらかの口実を見出し、小細工を弄しようとしていた関白は、この訴えを小耳にして満悦し、直ちに彼を追放処分に付した」と。

いや、やはり秀吉の陰謀だったとしか思い当たりませんね。私は、ルイス・フロイスファンですので記述されているその通りと思っています

す。  
さて、なんだかんだとまたまた長くなつてしまいましたが、最後にもう一つ言わせてください。(手短にね！)

波多親が有馬藩からの養子とは、あら、意外！とは思われませんか？うか？ご存知だったでしょうか？

しかも、有馬藩、日野江城主と言え、またしてもキリシタン大名で海外貿易にたけ、しかも、有馬にセミナリヨを建設した、キリシタンに優しい有馬晴信ではありませんか！聖画を描かせるためにイタリアから宣教師で絵画の先生、ジョバンニ・ニコラウを呼び寄せたあの有馬晴信は、おお、なんと!! 波多親の弟だったとは!!

余談ですが、常々、やきものの色絵の顔料は有馬のセミナリヨの宣教師が持ってきたものという論文もあります。

そして、もっと驚いてください。我が町、有田町、有田唐船城主の有田盛(さこう)は波多親の叔父さんに当たるのであります。

さらに、もっとそれよりビッグな

叔父さんがいらつしやいました。誰でしょう？その人の名は、日本で初めてキリシタン大名になった、現在では、武雄から新幹線も通っている、長崎県の大村純忠です。

有田盛も有馬藩からの養子で、大村純忠と兄弟です。よって、大村純忠はお兄さんにあたります。ひやあ、有馬ファミリー凄すぎでしょ。

実は余談ですが、今回、武雄の「後藤家信」について書く予定をしておりました。竜造寺の優秀な息子家信は武雄の後藤貴明の養子になった領主ですが、なんと！イエズス会に「飯盛」という地を寄進したいと申し出たと言うのです！このように、「キリシタン研究」誌に記載があり、色んな視点からみる日本の歴史、キリシタン歴史研究はとても面白いですよ。

さあ今度こそ、最後に、もう一つだけ、言わせてください。波多親は、唐津焼を推奨し擁護した焼き物好きだと推測いたします。

実は、1588年に波多親は上洛し、千利休と津田宗及の茶席に招かれて、お茶に自信が持てたと記されています。すごい！

そして、千利休と言えば「ねのこ餅」という筒形の奥高麗茶碗を持っているのは有名ですね。今回、初めて、「波多親と千利休 & 津田宗久」との茶人との接点があった事がわかり、とても嬉しく思いました。親さんのパーソナリティーを少しですが垣間見たような気がして波多親さんの大、大、ファンとなりました。

よかった、よかった、この放映された「唐津玄界灘に抱かれて」の番組を母に見せたかったあ!! いえ、母の大叔母さんこそ、観て欲しかったと思います。

443年経った今でも、玄界灘岸岳城近隣の人達が、まるで、昨日起こった事のように、至る所で波多親一族と家臣達を供養している姿を。



秀の前と波多親を祀ってある墓石

## 七十年前を回顧する

中村 貞光

私は終戦から四年半経った頃の昭和二十五年一月に上幸平で産声を上げた。

記憶を辿ると、その頃の我が家は小さな食料品店で、店の入口付近には一斗缶が幾つか並んでいたことをおぼろげながら覚えていて、その一斗缶には食用油が入っていて、柄のついた杓で量り売りをしていた。古い家族のアルバムに、三々四歳頃だろうか幼い頃の写真見つけた。店の中で頭を掻きながら恥ずかしそうに



昭和30年頃？自宅前 「おくんち」だろうか



昭和の頃の生活必需品

坊ちゃん刈りの私が一斗缶の並んだ店の入口で写っていた。その頃の私は油屋の坊ちゃんと呼ばれていた。

家の奥二階にある倉庫には、ガラス製のランプが倉庫の半分ほどにぎっしり並んでいた。ランプ用の燃料になる油も扱っていたことが分かる。家庭に電気が入る以前の生活にはランプは欠かせない必需品だった。祖父は油を売って生計を立てていたが、電気が家庭に入り徐々にランプ用の油は不要になっていく。七輪も店頭で並んでいた記憶がありもちろん販売をしていた。

昭和の時代は車社会になりガソリンが普及していくわけだが、祖父は油の商売から手を引き、焼き物の行商を始めたようだ。行商で立ち寄った広島で後の後妻となる祖母と娘を有田に連れてきた。中村家の長男が戦死し、祖母の連れ子である娘は中

村家の次男だった父と所帯を持ち中村の跡取りとなった。祖母は戦時中仕事を持たない弟家族を有田に呼び寄せ食料品を扱う我が家の店を任せた。私が生まれる前年に祖父が亡くなり、我が家は一時期祖母を筆頭に、叔父、従姉（伯父の長女）、私の両親、二人の兄、姉、私、そして祖母の弟家族四人が住む十三人の大所帯になっていた。

自分のことはこれくらいにして、当時の有田の風景は暮らしはどうだったのか幼い時の記憶を頼りに書いてみたい。

私の自宅前には岩尾對山窯の工場があった。家の隣は絵描きの工房があつて、その隣には魚屋があつた。路地を挟んでその隣が松本家であつた。魚屋の前にはふくろやという衣類や小間物を扱う店があつた。我が家の上隣は有品堂という焼き物屋でその二軒隣は岸川肉屋があつたが、その隣に大関という食堂も兼ねていた。我が家の周辺には食料品を扱う小売店が我が家を含めて3軒、肉屋は2軒のほか焼き芋を焼く店もあり日頃の生活用品は近くで充分に賄える環境があつた。

魚屋の記憶を辿ると、店の入り口にあるトコ箱にはハエがいっぱい飛



クジラの小腸 百尋（ひやくひろ）

び回っていて、手で素早く取っては地面にたたきつけて「ハエ取り名人」だと得意げになっていた。正月近くになると、クジラの小腸を店の前で湯がいていた。百尋（ひやくひろ）と言った。正月の料理には必ず出てきたので食べた記憶が鮮明に残っている。茹でられている時の匂いが独特で、臭くてたまらなかったが食べるとこれが美味しかった。

肉屋の路地では、鶏の首を切り血を抜く光景が目には焼き付いていて、何と残酷なことを平気にやるものだと子供ながらに思っていた。

目の前の岩尾の工場からは、お昼になると職工さんたちがお弁当のおかずと総菜を買いにきていた。我が

家では野菜の天ぷらを良く揚げていた。サツマイモの天ぷらは今でも当時の記憶が蘇り家内に良くリクエストする。

また、近くには煙草と本や文房具など売っている嬉野書店があった。

金ちゃんの店と呼んでいた。叔父に煙草を買ってきくと頼まれ良く通った。その隣には貸本屋があり漫画本を良く借りていた。店の人の目を盗んでは大人の本をドキドキしながら立ち読みした。少々マセていたのだろう。



荷馬車はこの絵より多くの荷を積んでいたの隠れて乗れた

小学校に通っていたころは、荷馬車も良く通っていた。藁で荷なつた焼き物を積んだ荷馬車は表通りで良く見かけた。「カップポカップ」と馬の歩く音が響いた。学校帰りには荷馬車の後ろにつかまりぶら下がって帰宅したことが良くあった。

その頃は便所の汲み取りも荷馬車で来ていた。家の入口から便所までの通路に新聞紙を敷き詰め、桶を肩にかけて何度も往復しながら家の中を通るので臭くてたまらなかった。ずっと後になって分かったのだが、農家の人が各家庭の汲み取りに来ていたようだ。代金を今は業者に払うが昔は逆だったらしい。もちろん水洗のトイレが普及している現在でも有田はまだまだ遅れていて、昔のポットトイレが現存している。

我が家のすぐ隣が柿の木小路かきのきしゅうじと言った。当時は舗装されておらず、ビー玉や釘ヌキ遊びと言って5寸釘で相手の釘を倒す遊びなのだが、釘を土に刺すにはほど良い固さで遊ぶには持ってこいの場所だった。松本家は隣に有田物産という焼き物の会社を持つていて、表通りから路地を入り奥にある建物では、藁で焼き物を荷造りする荷師さんの器用な荷造り作業を今でも思い出す。また小路庵（江副家）の隣には藁を保管する大



柿の木小路の裏山「黒岩」

きい建物があつて、子供の頃は良い遊び小屋になっていた。

裏には小川が流れ三空庵広場があり、大きなイチヨウの木と隣に地藏堂があつた。今は地藏堂は当時と場所が変わっている。地藏堂の横には久部さんという馬を飼っている家があつた。50mほど先の川沿いに馬が飼われていた。馬小屋の横から山に登ると10分ほどで黒岩に着いた。黒岩に上ると町中が良く見渡せ、使い古しのノートを持って山に登り紙飛行機を作り飛ばした。当時の裏山では縄などを持って行つては小屋づくりもして遊んだ。ロープを何本かの木に張って小枝を張り巡らすと小さな小屋が出来た。持つてきたおにぎりやお菓子を食べた。

また、秋には裏山でマツタケを探して取っているところを地主に見つ

かり逃げたことがあつたが、それ以来マツタケ取りは一切やってない。

三空庵広場には上幸平地区と大樽地区の墓があり、その双方に分かれてゴム銃にパチンコ玉くらいの投げ玉の花火（痛癩玉）を挟んで撃ち合う遊びもあつたが、今思い出すとかなり危険な遊びをしていたものだ。

また我が家の話に戻るが、私の父は商売には向かず、我が家の店は祖母の弟夫婦に任され、父は一時期自宅の奥の部屋で煎餅を焼いていた。二人の兄も仕事を手伝っていた。出来上がった煎餅を一斗缶に詰め込み大村あたりまで自転車の乗せて行商に奔走した時期があつた。母の話では売れずに持ち帰ってきたこともあつたという。

そんな時代でも、寒い冬の時期などは、学校から帰ると父の仕事部屋は煎餅を焼くので暖かく、しかも煎餅の切れ端が出るので、甘いお菓子など買えない時代でも、その切れ端の煎餅が何よりのおやつでもあつた。

当時はその切れ端を「ミミ」と呼んでいた。私の同級生は時折私についてきて柿の木小路で待っていると、私は急いで自宅に戻り煎餅の切れ端を菓子箱の上蓋に入れて友達と一緒に



昭和時代の白黒テレビ

に食べた。友達は「貞みっちゃんはいつもこんなうまかもんば食べられて良かね」と口癖のように言っていた。その頃の有田は戦後から数年の時期でもあり、高級なお菓子や食べ物不足しており、特に甘いものなどは贅沢品だった。食べられるだけでも良い時代でもあった。

煎餅の材料に卵の白身を使い、残った黄身は自家製のマヨネーズに変身した。黄身の中に熱した油を少量ずつたらし入れながら良く攪拌して作るのだが、幼い頃はマヨネーズ作りを手伝い得意満面だった。

周囲に目を向けると、電話などはまだ置いてなくテレビもまだ高級品で各家庭にはない時代だ。我が家は小さなトランジスタラジオしかなかった。隣は焼き物商売をしていて子供

ながらに見ても我が家よりずっと裕福な生活をしていた。テレビも早くから見ていて、私は隣に入り浸った。「チロリン村とクルミの木」「ひよっこりひょうたん島」「赤堂鈴之助」「月光仮面」「快傑ハリマオ」「鉄人28号」思い出すと勉強そっちのけで夢中で見ていた。しかもよその家で。

時には風呂屋に入りについて風呂屋の二階にあったテレビに見入っていたこともある。力道山が出るプロレスなど夢中になり、真つ暗な部屋の中は白黒テレビが主役で、観客みんなが大声で応援していた。

8月の祇園さんの時期は、小川には大きな武者などの行灯が造られて飾られて、テキヤの店も幾つも並び賑わった。八坂神社の川飾りの鮮やかな色彩を思い出す。娯楽の少ない時代で夏まつりは大賑わいした。大きな白い幕を張り、映画も上映された。

有田小学校も当時は木造校舎で、生徒数は1400名を超えていた。小学校4年生になると新築工事が始まった。5年生から新校舎である。担任の先生が宿直の時などは、先生から「泊まりにくぞ!」と声が掛り、友達と良く泊まりに行った。



夜になると先生と一緒に暗い校舎を恐る恐る見て回った。勿論、勉強などはそっちのけで遊んでいた。遠くで夜泣きそば(屋台のラーメン)のチャルメラの音色が聞こえると、ラーメンが食べたいと先生に強請<sup>ねだ</sup>ったこともあった。明星ラーメン「チャルメラ」のイラストは、そんな昔の思い出を懐かしく思い出させてくれる。

子供の頃の記憶は70年以上たった今も、未だ色褪せず鮮明に蘇る。

実は、10年以上前から、過去を振り返りながら「自分史」軌跡を書いてきたので、一部を切り出してさらに記憶を辿りながら文章にしました。皆様にも自分史の執筆をお勧めです。

## あとがき

今回の会報も無事に編集を終えることが出来ました。まずは皆様に御礼申し上げます。

昨春秋に大串和夫さんが亡くなり2カ月以上が経ちました。突然の訃報に心が折れそうでしたが、鶴一樹さんと山口信行さんが新たな史談会のまとめ役として協力頂けることになり、ひとまず安心です。これから会員の高齢化と減少に歯止めがからず、何かと気が落ち着かない日々が続きますが、会員の協力を頂きながら無理のない範囲で楽しい運営が出来るよう事務局の仕事を続けたいと思っています。

今後とも皆様よろしくお願い致します。

